

手な薩摩が薩摩切子の復刻版を作って大々的に売り出したため、日本のガラス工芸の中心地で生まれた天満切子が、薩摩切子を真似ているというような誤解を受けているのです。大阪人の広報下手からそうなったのかも知れませんが、とても悔しい思いをしています。私は大阪大学の広報担当として、また歴史研究者として、そうした大阪独自の文化を国内外に発信していきたいと思っています。

佐藤 日本人は自ら主張して何かを伝えるということが、基本的に苦手なようです。とくに大学。企業も強いとはいえません。新聞記者の側からいうと、情報発信のためにどれだけ汗をかかかということが大切です。さまざまな知的財産をもつ大学においては、難しい論文などを一般に分かりやすく翻訳して、今の時代感覚にあったものとして提供する努力が必要でしょう。企業にしても、広報戦略にあまり人もお金もかけない。ところで、先ほどもお話のあった懐徳堂のように、かつての大阪はとても風格のある歴史都市であったと思います。歴史都市の条件は「世界性、先進性、学術拠点性、自治能力、健全なコミュニティー」の5つだと聞いたことがあります。しかし近年の大阪を見ると、このいずれをも十分満たしている実感できません。明治2年に懐徳堂が閉鎖されましたが、同じ年に京都では近代小学校が建てられ、明治の荒廃期に人づくりをスタートさせました。また、京都府の多額の予算を使って大阪から後の第三高等学校を誘致し、現在の京都大学の礎を築きました。こう

した施策は大阪とは非常に対照的です。また、私は文化や伝統は継承されることが前提だと考えます。しかも単に守るのではなく、革新の連続によって保たれるべきものだ。しかし、大阪では経済優先に走るあまり、共に汗をかいて文化や伝統を革新的に高め守ろうという自覚が共有されていないように見えます。その意味で、大阪大学が旗を振っておられる「21世紀懐徳堂」運動は、これからの大阪を変える起爆剤になると期待しています。

武田 今おっしゃった21世紀懐徳堂こそが、一般に分かりにくいと言われている大学の研究などを社会に広く分かりやすくアピールするための窓口としての広報機能を担っています。大阪大学は産学連携が進んでいると言われますが、私たちは今、「社会学連携」して大学の知財を社会にどう分かりやすく発信していくかということに取り組んでいます。そこで21世紀懐徳堂は、日本一の規模となった大阪大学のさまざまな活動の全体の窓口となって、教養講座をするだけでなく、大学で今何が行われているのかを目に見えるかたちで発信できる、仕組みづくりを進めています。そうした意味で、大阪大学が広報に非常に力を注いでいるということをお分かりいただきたいと思います。

文化の連続性が自信と誇りを生む

田中 堀井さんの「本当に大事なものを私たちの時代になくしてはならない」というご意見を聞いて、ヨーロッパを旅したときのことを思い出しました。不思議なほど、どの都市へ行っても、歴史遺産を守るために大変な人と費用と時間をかけていることが伺えました。自分たちの文化を懸命に守ろうとしている姿に、尊敬の念すら抱きました。そうした取り組みの積み重ねで、我々旅人を魅了する歴

工業都市時代のビスケット工場を文化拠点に再整備 (フランス・ナント市)



新進アーティストの登竜門『アートストリーム』 (サントリーミュージアム/2008年11月)

大阪の大学生がプロデュース 『御堂筋学生音楽祭 (大阪市中央公会堂/2007年9月)』

